

『プリフラ』 - 雨鼠

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

水面にぷかりと浮いているものがあつた。

そしてそれをじーっと無言で眺める者があつた。黙っているの、私は最初、真剣に実験をやっているものだと思っていた。

「波香。あの、さあ」

珍しく実験室に訪れた沈黙を破つたのはやはり朱音だつた。

「呼び捨てすんなよ」

私は返事をする。名前を呼ばれるまでもなくこの部屋には二人しかいない。

「これ、だめだよな？」

「んん？ 今、手が離せないんだけど」

「水にさ、」

「何、ゴミでも落ちたの？」

「リトマスさんがね」

「へえ」

「青いの」

赤でも青でもだめじゃん、と顕微鏡から目を離して私はつぶやいた。本当はあまり中断したくない。自分の気に入っている眼鏡と接眼レンズの相性があまり良くないからだ。間合いを計るのにいつも苦労して、苦労した頃には目が疲れている。かといってコンタクトレンズを使う気は起こらない。あれは眼球にとって異物以外の何物でもない。あんなものをつけていたらきつと酷いことになる、と言ったらソフトコンタクト愛用者の朱音が悲しそうな顔をしたので、あまり口にしないように心がけている。

邪魔になる長い髪を後ろに結わえ、真っ白な白衣をまとつた朱音は、にへー、と笑つていた。気楽なものだ。こっちはユスリカの幼虫をぶちぶち潰しているというのに。こんなこと絶対に私の趣味ではない。それなりに面白いとは感じるが、実験の手引書通りに進めているだけなので、研究の喜びとかいうものとはほど遠いだろうと思う。そもそもそんな高度な実験はできない。受験生なのだから仕方ない。これは息抜きなのだ。息抜きに幼虫を蹂躪するのはやはり狂科学者のすることだろうか。凝固変色した白衣の血痕を見ると思い出す。ふざけて実験室に入ろうとした友人の目の前に、剖検前のニワトリを逆さ吊りにして現れたあの日から、私は周囲の人間にとって、マッドサイエンティストになってしまったのだろう。いい迷惑だ。

化学部とかいうところに私たちはいる。高校の部活だから大した規模じゃない。化学部なのに、実験の中心は生物分野である。それは顧問が生物の教師だからなのだが、来年で定年という老体のためもあってか、あまり実験室に顔を見せることがない。そのため、私を含めて二人しかいない部員が好き勝手に実験をやっている。本当なら家で問題集を片付けたい。不可解な数皿の問題を解く魔法を誰かに訊ねたい。けれど、朱音が週に一回は参加しろとうるさい。仕方なく顔だけは出すことにした。顔を出すと実験ノートに何か書けと言われる。やかましいので適当に実習書にある簡単な実験を見繕って手を動かし、ノートにかりかりと書きつづる。いつの間にか没頭しているから忌々しい。それを見て朱音はいつものように、にへー、と笑う。朱音も来年受験生になったら痛い目を見ればいいのか。畜生。

その朱音は、さっきからため息混じりに実験の失敗を全身で嘆いている。水面に垂らした油滴。その油滴に乗った一片の青色リトマス試験紙。一体どこから混入したのか定かではないが、油を吸ってしまつていた。実験失敗である。

朱音がやっているのは体積の分かっている油を水面に垂らして面積を調べ、細長い油分子の長さを計測しようというものだつた。体積を面積で割ると高さが出る。その高さが頭を下にして水面にびっしりと並んでいるはずの油分子の長さなのであつた。

「そんなの確認できるかっ」

朱音はヤケになつたのか、人差し指でシャーレの中をぐるぐるかき回しだした。う

るさい。気が散る。

「どしたの急に」

「だってさ、」

朱音曰く、「油が並んでいることは目に見えないから分からない」だそうだ。だからこんなこと無駄だと言いたいのだろう。

「そんなこと言っていると、ノート埋まらないよ？」

「いいよ。どうせ失敗だもん」

「失敗したってちゃんと書いてたでしょ、先輩」

「んー。まあね」

私たちの一つ上の学年にいた先輩は、去年きちんと化学部の部長としての仕事を全うし、きちんと受験勉強を成功させ、すんなり東京の大学に入っていった。どうしたらあれほどスマートに事がこなせるのか分からない。忌々しくて仕方がない。

「油が水に溶けていく様子を初めて観察することに成功！」

突然朱音が声をあげる。もうだいぶ慣れた。

「溶けねえよ。シャーレ洗えよ。ちゃんとノートに書けよ？」

しかし彼女はぐるぐると渦を描きながらため息をふーっと水面に吹きかけた。彼女のその行為に係る実験的意義は何もない。平たく言うと無意味なことをやっているのだ。と言うか、油は無意味に広げずに取り除くべきだ。

「例えばさ」

朱音は遠く左上に目線を動かした。

「失敗から大発見！ みたいな」

「ふむふむ？」

「二〇××年、シャーレにリトマスさんが飛び込んできて、アカネシリンを発見！」

「あー。フレミングさん？」

フレミングが抗生物質——ペニシリンを人類史上初めて発見したきっかけは、シャーレの培地に偶然アオカビがついたことだった。有名な話だ。

「そそ。アカネシリンは肉体疲労時の栄養補給に効果があります」

「勝手に作るなよ。ねーよ、そんなもん」

朱音の実験は別に生物学的な意義はない。それに、リトマス紙の混入で何かリトマスの新たな性質が明らかになるだろうか。考えづらい。

「何だと！ 喰らえ！ 必殺テトラサイクリン！」

「さっさと洗えバカ！」

ちなみにテトラサイクリンも抗生物質の名前である。

バカと言われた朱音は、ぐだぐだ言いながらノートにさらさらと結果を書き込む。

「もう今日は遅いから再試はなしねー」

朱音は投げやりにそう言ってパチンと音を立てて鉛筆を置く。

「良い子だから静かにしてて」

と私は思ったことをそのまま口から出す。しかしそれは幼虫に向かっての言葉でもあった。ビーカーの中のユスリカをスポイトでちゅっと吸ってプレパラートに乗せる。田んぼの中を泳いでいた彼らも、よもやここでまな板の鯉となるとは思いもよらなかったであろう。とんだ大出世と言えないことはないかもしれない。

「残酷よ！ 残酷だわ！」

不満げな顔で朱音がちょっかいをかけてくる。

「嬉々としてニワトリを鍋に放り込んでたの誰よ」

「あれ美味しかったよね」

「美味しかったね」

解剖が終わった後は煮て食べる。そのために食べられるものしか解剖しない。となると、必然的に候補はニワトリに絞られる。命を粗末にしてはいけない。私も今の実験をあまり粗末な結果に終わらせてはいけない。しかし、朱音があまりに帰ろう帰ろうとうるさいので、私もウンザリして顕微鏡のライトをオフにした。

「いいのさ！」

朱音に肩を抱かれる。いつものことなのであまり驚かない。が、うっとうしい。

「聴け若人！ 失敗を重ねることは無駄ではない！」

「おー。朱音、いいこと言うな」

「そうよ、失敗は成功の父！」

「母だよ」

カチャン、と洗い籠の中のシャーレが静かに音を立てた。タイミングが良すぎる。実験室全体から笑われた気がした。

「そだっけね」

「いろいろ、台無しだ」

こいつはホントに来年受験生なのか。

顧問の磯谷が入院したのは、木枯らしに似た風が校庭を時折駆け抜けるようになった秋の口だった。喉に悪性の腫瘍ができたとかで。幸い発見が早く、大事ではないらしいが、何せ場所が場所なので、しばらく教壇には立てないとのことだった。

「なくなっちゃうのかな。うちの部活」

朱音がシャーレにサラダ油を垂らしながら言った。一瞬「亡くなっちゃう」と認識してギクリとした。

「分かんないでしょ、まだ」

私は私で試験管の親玉のような容器を睨んでいた。今日は花の色素を分離抽出するのだ。

「でも、ガサ入れとか来るんじゃ」

朱音は物騒なことを言う。

「悪いことはしてないよ」

「そだけどさ。実態とか怪しいものだよ」

「そんなの、文化系の部活ならどこも変わらないでしょ」

生活指導の教師の野太い腕が漫画研究部の部室からコタツとゲーム機を運び出す様子を、私は笑っていた。今はそれほど笑えない。

「先輩、悲しむね」

「そうね」

二言目には先輩先輩。朱音は先輩のことが今でも好きらしい。

「連絡取らないの？」

「ん？」

「そんなに気になってるならメールでも電話でもすりゃいいものを」

私の探るような口調に、鈍い朱音も何の話か気がついたらしい。

「彼女いるんだもんさ、向こうに」

諦めたような彼女の口調は、なぜか私の胸を締め付けた。少しだけ悔しい気持ちになった。

「何で知ってんのよ」

私は言葉裏にそんな感情を出すことなく朱音に訊ねた。

「電話で訊いた」

「したんだ」

意外だった。

「最近は全然」

「連絡取ってないのは、それ聞いてから？ もしかして」

「そだね」

朱音がぼそりと言って、私はふーんと返事をした。バカなことばかりやってた先輩だった。いつか実験ノートを化学のワンダーランドにしてやると意気込んでいた。科学ではなく化学。少なくとも私が入部したときには既に生物実験部と化していたここで、先輩と朱音だけが化学の実験ばかりしていた。今もそうだ。

変わりたくないのだろうな、と思う。先輩のいた頃の空気は今の部活にはない。あの頃いた部員は全部で九人。卒業したり辞めたりで、私の学年まで残る人はいない。三年生まで残っている私も、考えてみれば変えたくないのかもしれない。何を变えたくないかと訊かれれば答えに詰まる。けれども、あの頃の空気は、やはり恋し

い。変わってしまったからこそ、固執するのかもしれない。

「あー」

私は思わず情けない声をあげる。

「どしたの」

「紙が傾いてた」

朱音の驚いた声が「え」と短く実験室に響いた。

「珍しいね、失敗するの」

「そうね。こんなときもあるわ」

「帰るか」

お前の実験はどうしたんだと訊こうと思ったが、水が張られていないのに油だけが数滴垂らされたシャーレが目にとまり、私は口をつぐんだ。

二人ともそんな調子だった。今日はきっとツイてない日だ。そんな風に思っていたから、扉を開けた向こうにいた人影に、私は心底驚いた。

先輩だった。

見間違えるはずもなく。あの頃よりも少し小綺麗な格好をした先輩がそこにいた。

「元気してるかい？」

半年以上会わなかった者同士の会話とは思えなかった。先輩らしかった。

「ま、そこそこに」

「いいや、お前は元気がないね」

「昔からこんなもんですよ。先輩のテンションが高すぎるんです」

感動的なほどにあの頃の会話の雰囲気がお互いの口から再現されていく様子を、私は軽い驚きを持って見ていた。

「相方さんとはうまくいってるんです？」

突つつくように、少しだけ意地悪に、私は訊いた。

「それが全然」

「え」

「それでもって昨晚大ゲンカ。『もうお前なんかとやってられるか！』『何よこっちこそっ！』ドカツ！ バキッ！ 大乱闘の末、命からがら逃げ帰ってきたという……」

「うまくやってるみたいですね」

「まあな」

本当にうまくいっていないときの先輩は、話題にすらしようとしない。うまくいっているときほど照れて茶化して誤魔化すのだ。「全然」と言われたときに少しだけ勝ち誇ったような気分になった自分が腹立たしくて恥ずかしい。

しかし、今日に限っては茶化していただけではなかったようだった。

「見舞いだよ。磯爺の」

磯爺というのは、うちの顧問だ。もっとも、そんな呼び方をするのは先輩だけなのだが。

「もう行った？」

先輩に訊ねられた。訊いたのは今朝なのだから、行っているはずがない。

「いいえ」

「行っといた方がいいかもよ？」

「そんなに？」

「分からん。知らんのか」

「あんまり」

「使えない奴だ」

「あんまりだ」

先輩と私は笑った。ぎこちなくではあったが、私は先輩との距離が離れていないことになぜだか安堵した。先輩の考えは、あの時と同じで、何も分からなかったけれど。

笑いが途絶える頃に先輩が珍しくまじめな顔でもう一度「行っといた方がいいかもよ？」

と言った。

「今しかできないからさ」

そうだな、と私は素直に思った。

「あれ！」

私の後ろから裏返ったような声が出た。声の主は一人しかいない。

「先輩だー。イエーイ」

「イエーイ！」

朱音と先輩は拳をコツンとぶつけあう。

「何しに戻ってきた！」

「お前との決着がまだだったことを思い出してね」

「今更思い出したかこの唐変木！」

言葉の内容とは裏腹に、朱音は笑顔だった。ここ最近目にしなかったぐらいの満面の笑みを浮かべていた。

トテトと駆けていった朱音が手にしていたのは予想通りの品。

「ノート、これ」

予想外だったのは、いつも私が書かされているものとは違っていたこと、それと渡されたノートが二冊に及んでいたということだった。

先輩がノートをめくる。

「すごいな」

私も驚いた。私の知らない間に行われた実験の記録が細かに書かれていた。部員が二人しかいないこの部活で、私が受験勉強に頭をひねっている間に朱音は化学の世界に没頭していたのだろう。羨ましかった。

「素直に負けを認めなさい！」

そう言った朱音の頭が先輩の大きな手でくしゃくしゃと撫でられる。複雑な表情を浮かべながら、でも間違いなく朱音は、はにかんでいた。嬉しそう。この一年間で一番嬉しそうな顔をしていた。

「何だよ泣くなよ」

「泣いてない！」

「目に油でも入ったんでしょ」

私も朱音を突つつく。

「入ってない！」

朱音は全力で否定して、私のすねを蹴飛ばした。ちょっと痛かった。でも私は我慢した。涙なんか流してる場合じゃないのだ。私も、朱音も。

いつかここを出て行かなければいけない日が来る。安穏と花片を眺めていればいいだけの日々は終わる。そして恐らくは先輩が抱いているような感慨を私も抱くことになるのだろう。今しかできないことは今しかできないのだ。

下らない実験に意義なんて要らない。それは私の中にこの花を長く咲かせ続けるものであればいいのだ。だから、朱音の持っているノートは救いなものだった。先輩にとっては既に、私と朱音にとってもいつかは、プリザーブドフラワーのようにいつまでも色あせない思い出となるだろう。朱音が先輩を好きで、先輩が私を好きで、私はただ試験管だけを睨んでいて。それでもそんなことが全然気にならないぐらいに、毎日が楽しくて仕方なかった。あの頃の花は今だってこんなにも美しく保存(プリザーブ)されている。だからいつまでも見つめていられる。飽きて目を離しても、すぐに振り返れば、そこにそれはある。この光景をしっかりと目に焼き付けておこう。横から二人をからかうことも、もうすぐできなくなってしまうかもしれないのだから。

「シャーレに浮いてるリトマス紙みたいなものですね」

私は振り返り、先輩に言う。わざと髪が振り乱れるように。

「何が？」

その声には何の感慨も含まれていない。変わっていない。こういうところが嫌いだ。

「私たちです」

「え？」

朱音が「やめろやめろ」とうるさかったので、私は「何でも」と笑った。何度もすねを蹴られる訳にはいかない。

余談だが、花の色素はちゃんと抽出された。朱音が油を注いだシャーレに私が花片を浮かべておいたから。その行為に係る実験的意義は何もない。平たく言うと無意味なことをやったのだ。

色はちゃんと抽出された。もちろん、それだけでは花に含まれる全ての色を分離することはできなかつたけれど。

それでいいのだ。

[戻る](#)